

ここでは、中学生のキャリア教育支援“job job”プログラムを実際に授業に取り入れた二つの中学校の事例を紹介します。1校目は、渋谷区の鉢山中学校の事例です。取材に応じてくださったのは、3年間“job job”プログラムを担当した仙北屋正樹先生です。2校目の事例は、北区の赤羽中学校です。こちらは、区内で教育支援コーディネーターとして活躍されている大川文子さんにお話を伺いました。

北区立赤羽中学校の“job job”プログラム

■年間を通じて、各科目とも連携しての実施



教育支援コーディネーター 大川文子さん
赤羽中での取り組みを他の学校にも提案できればと考えてます

赤羽中学校では、平成19年度、初めて“job job”プログラムを2学年で実施しました。「総合的な学習の時間」を軸にして、「国語」＝取材活動、「美術」＝冊子作り、「技術」＝パソコン作業と、各科目の授業展開の中で各科目間を連携させる試みを検討しながらの実施です。

大川さんは、「“job job”プログラムに取り組んだことで、例年の職場体験も年度末の冊子作りの中で明確にしたテーマを意識し、事前にインタビューの準備を行うなどしたことから、職場体験の中で何を不得たいのか“視点”が定まったように思います。職場体験だけ行うより年間を通したプログラムを実施することで体験がより生かされると実感しています」と語ります。さらに今後の抱負として、「“job job”の取り組みのような一連の流れをもったキャリア教育のプログラムを、北区の中の様々な企業の協力を得ながら無理なくできるような方法を考えたいと思っています。その中で私たちのような教育支援コーディネーターが一端を担えるようなしくみを他の学校にも提案していきたいです」と赤羽中学校で感じた手応えと経験を他の学校にも活かしたいと次の展開を模索しているようです。

■教育支援コーディネーターとして

1年間、教育支援コーディネーターとして“job job”プログラムを実施しての感想を話していただきました。「まずは、先生方との関係づくりですが、当初、先生方は、このような「企業が支援するプログラム」へのかかわり方が見つからない様子でした。そこで、“job job”プログラムを行うことで生徒に変わってほしいことについて話し合う機会を作ったのですが、そこからお互いの役割分担が見えたような気がします。共通のテーマで先生方と話し合うことができたということは貴重でした。違う立場の人が同じ子どもたちに携わるのですから、お互いの考え方を知ることはより深い成果を子どもたちが得るためにとっても大切なことだとあらためて感じましたね。

それから、地域活動をしている関係で区の方や、商工会議所や法人会などと接する機会を持つことがあります。学校のことという教育委員会の中だけで対応しがちなのですが、これからは様々な地域の人たちにキャリア教育にかかわっていただければと思っています。今まで、教育支援コーディネーターとしては小学校を中心に活動してきましたが、今回の“job job”を通して中学校にも新たな地域とのかかわりあいを実感していただきたいと思います」

■中学生のキャリア教育の大切さ

“中学生”という時期にキャリア教育を行うことについて、大川さんは次のように語ります。「中学生はまだ社会をよく知らないで、キャリア教育のプログラムを通して、いろいろな世界(仕事・職業)に関心を持ってもらいたいと思います。中学生はこれからイメージをふくらませて行く時期だと思うので、親の仕事、自分の周りの人々の仕事、例えば、新聞社一つとっても、目に見えやすい存在の記者だけでなく、いろんな分野の職種の人がいて成り立っていますよね、そういった世の中の様々な仕事を知って関心を広げてもらいたいです。そして、その関心を高校生になってから、自分の生き方の中に繋げてほしいのです」

また、「自分探しが始まる中学生の時期に色々な生き方や仕事観に多く触れて、“仕事”や“働く”ということに、“夢”を膨らませてほしいです。やりたいことを見つけて、それを目標にチャレンジしたり、自分を高めようとしてほしいですね」このように語る大川さんの中学生をみつめる視点は、渋谷区立鉢山中学校の仙北屋先生と共通するものがあります。小学生でも高校生でもなく、中学生だからこそ意味を持ってくるキャリア教育支援のプログラムがあるようです。

「このプログラムを始めた頃は、父親の職業についても具体的に知らない生徒が多いことに驚きました。働くということがとても遠いことなのかなという印象を受けたのです。将来どんな職業に就きたいのかと聞いてみても、ちょっとさみしい答えで

したね。もちろん、仕事は生活の糧ですけど、“自分の能力や思いを活かす場”“自己実現”の場でもあってほしいですね。働くことについて、もっといろいろなことを知ってもらいたい、働くことに憧れる気持ちというのは、どうしたら育つのだろうかと考えました。“job job”プログラムを実施して得たその解答は、生徒たちが、“憧れる”職業人、“熱い”大人たちに触れることだと思います。生徒たちにはそういう経験が必要なんだと思います。そしてその延長線上に“どういう仕事が見えたいか”が見えてくればと思います。」



表紙の言葉「見えない扉のカギ探し」、「探し続けよう 自分だけのカギ」が生徒の気持ち



真剣に会議中です